

明治中期における地域の私立英学校構想と同志社

田 中 智 子

はじめに

東華学校は、宮城英学校と称した一八八六年九月から翌年六月までの時期を含め、一八九二年三月の閉校に至るまでの約五年半、仙台に置かれていた私立学校である。校長には新島襄が就任し、デフォレスト (DeForest, John K.H.) をはじめとするアメリカン・ボードの宣教師が教員を務める一方、運営主体の東華義会は、宮城県知事以下、県史や地域の有力者らによって構成された。宣教師の給与はアメリカン・ボードから支出されたが、学校は、仙台の出身者や広範な宮城県下の各地域から集められた醸金によって経営されていた。

『同志社百年史』は、同志社通史の一角をなすものとして東華学校を扱い、一章分をその歴史にあてている。⁽¹⁾ それは、「新島にとって仙台における同志社の分校ともいべき東華学校」⁽²⁾との見解に基づいている。「同志社分校」⁽³⁾との表現は、新島がこの学校を「同志社之分校と申も不苦と存候」⁽⁴⁾と記したことに起源をもつ。そしてその後、東華学校を「同志社分校」とする見方は、教育に直接携わったデフォレスト、あるいは伝道史家田村直臣といったキリスト教界の人

物によって引き継がれていき、『同志社百年史』をもって定着したといえよう。⁽⁵⁾

さらに、最近の研究においては、「同志社分校」は東華学校にとどまらず、その対象を拡大しつつあるとみえる。その代表格が本井康博の諸論考であり、一八八一年の福岡、東京、あるいは一八八〇年代後半の仙台・新潟・福井、と地域名を列挙し、これらにおいて、「いわば同志社「分校」設立計画」が起こったとの認識が示されている。⁽⁶⁾

ところが、研究史上、この「分校」概念が問題とならざるを得ない状況が生じたことがあった。同志社大学人文科学研究所におけるアメリカン・ボード宣教師文書の共同研究において、岡山ステーション赴任宣教師の史料を扱った守屋友江は、岡山で設立が計画される学校を、“Kyoto School”すなわち同志社への“feeder”たるべき学校と記した英文を引用する際、“feeder”を「分校」と訳さずに、カタカナで「フィーダー」と記した。⁽⁷⁾そしてその理由を、「本井論文では仙台の例などをあげて「分校」と訳されているが、岡山ではむしろ、同志社へ入学する以前に基礎的な神学と英語教育を施す予備校的な位置づけであったと考えるべきであるため、あえて異なる意味合いを残すこととした。〔中略〕つまり、同志社という川の本流に流れ込む「支流」という意味合いが相応しいと思われる」と注記した。

本井は「分校」の語を積極的に用いる理由、あるいは「分校」の定義、「分校 (feeder)」と表記した必然性などを明示してはいない。だが、おそらく京都の同志社という本流から「流れ出る」ものとして各地の学校を捉え、“feeder”＝「支流」＝「分校」の語を用いているのだと守屋は理解した。ところが、守屋自身は、同志社という本流に「流れ込む」ものとして“feeder”＝「支流」を捉えており、であるからこそ、「分校」とは呼称し難いと考えた。守屋のイメージは、英和辞典の“feeder”の項に出っくる「送給装置」との訳語に近いといえる。

英文翻訳という問題に直面したことで守屋が浮かび上がった問題は、示唆に富むものである。「分校」ないしは“feeder”のイメージの差異は、学校の設置過程に着目するのか、あるいは学校のカリキュラムや実際の機能に着目す

るのか、といった視角の違いであると同時に、念頭に置く事例の違いでもあろう。

以上のような関心に導かれた結果、アメリカン・ボードや新島、同志社と関わりつつ多くの地域で展開した私立英学校設置計画を総体的に捉えることが課題視される。実際に設立された学校は、英学校のほか、英語学校・英語学舎・英語専門学校、そして「英学」や「英語」を付さない固有名詞など、様々な名称をもち改称も頻繁であった。また、目指すところの教育内容も、英語を用いた洋学一般の伝授から、英語という一語学のトレーニングまで、どこに重きを置くかは、各校・各時代・各関係者で異なっていた。本稿ではこれらの学校を便宜上「英学校」と総称することとし、できるだけ一次史料の呼称を尊重しつつ、叙述を進めていきたい。

一八八六年末の時点でアメリカン・ボードのステーションが設置、あるいは設置決定されていたのは、神戸・大阪・京都・岡山・仙台・新潟・熊本⁽⁸⁾の七都市である。このうち、神戸だけは周知の女学校のみ⁽⁸⁾の設立にとどまったが、残る六都市には、すべて男子私立英学校が設置された。そして、京都の同志社英学校を除けば、前身時代を含めたこれらの学校は、すべて一八八五―一八八七年に産声を上げている。

大阪・岡山・仙台・新潟・熊本のうち、研究が厚い仙台・東華学校、新潟・北越学館を除き、各英学校の設立経緯や実態は、史料的制約もあり充分に解明されているとは言い難い。本稿ではまず、既往の研究や新出の史料に依りながら、大阪・泰西学館、岡山・薇陽学院、熊本英学校を対象とし、開校経緯、運営体制、規模、財政、教師陣、教育目的、カリキュラム、現実の機能などについて比較史的に再検討する。この三例は、現地の日本人キリスト者が主導して学校設置が行われたケースである。

さらに、これらの学校とほぼ同じ時期に構想されたものの、結局は実現をみず、宣教師の赴任・ステーション開設・教会設置にもつながらなかった学校設立計画として、福井における動きを検討していくことにする。

以上をふまえ、最後に、東華学校にも触れながら、各地での動きを横断的に論じてみよう。

一八八〇年代後半は、いわゆる森有礼文政下の諸学校令（一八八六年）による学校制度の大変革期にあたる。当該期の教育制度や教育体制をふまえ、各地の動きをその時代性の中で具体的に捉えていきたい。

なお、一八七七年四月、「同志社分校女紅場開業願」⁽⁹⁾が同志社社長新島襄名で京都府に提出され、設置認可を受けている。九月には「同志社女学校」と改称されるが、東華学校設置に約十年も先立ち、まず女子教育の方面で「分校」の語が使用されたことは注目される。前掲ステーション設置地七都市の内、仙台を除く六ヶ所に女学校が設置されたことも合わせ、検討すべき問題ではあるが、今回は、男子英学校に考察対象を絞り、女子教育に関しては後日の課題とする。

一 大阪・岡山・熊本 ——日本人キリスト者を中心とした学校——

1 泰西学館

まず、大阪の泰西学館について取り上げる。この学校については、茂義樹や井上琢智による研究があるが、これらに示される事実を本論文の趣旨に沿って再検討しつつ、歴史過程を解釈していくこととする。

すでに一八七八年十一月ごろ、大阪ステーションの宣教師らが“boys school”を営んでおり、近くの官立大阪英語学校の生徒が放課後に集まって、英語の他に説教や神学を学んでいた。⁽¹⁰⁾これがきっかけとなったものか、デフォレストやレヴィット (Leavitt, Horace H.) の発議によって、大阪教会が主体となり、一八八〇年に仮の私塾が設置されている。ここでは、同志社の浮田和民や大阪教会の清水泰次郎、カーティス (Curtis, William W.) が教えていた。

清水自身、大阪英語学校で学んだ青年でもあり、大阪ステーションの教育活動は、当初から一種の人材供給源ともいえるこの官立学校との深い関係の上に成り立つものであったといえる。⁽¹²⁾

府の公認を得た本格的私立学校としての泰西学館設置が計画されたのは一八八六年四月頃からである。大阪の川口居留地には、ウィリアムズ (Williams, Channing M.) が一八七一年に起こした聖テモテ学校以来の歴史をもつ聖公会系男子校、英和学舎がチング (Tying, Theodosius S.) によって運営されていた。これが東京の立教学校に併合されると決まったことが、泰西学館開校の契機になったとも推測されている。

一八八六年九月一日、中之島に校舎が竣工して泰西学館が開校した。発起人には、大阪教会の吉束次武・安藤乙三郎・土居通豫の名が確認できる。⁽¹³⁾ 運営に関しては、理事会にあたる組織としての泰西学館委員会が置かれており、一八八九年十二月に大成社評議員会と改称された。社長には大阪教会牧師の宮川経輝、他の評議員には安藤・吉束・小林春召・本間重慶・富岡某が就任した。学校は地元からの寄附金と授業料のみによって成り立っており、アメリカン・ボードからの資金援助はない。

開校前後に教職員として名が挙がっているのは、花畑健起・広津友吉・亀山昇・田島藍水・土井通豫(兼主事)・左乙女豊秋、J・T・ギュリック (Guick, John T.)、オルチン (Allchin, George)、フィシヨルである。⁽¹⁴⁾ 大阪教会員の花畑や広津は同志社英学校で学んだ経歴をもち、外国人は言うまでもなくアメリカン・ボード大阪ステーションの宣教師である。以後も同志社卒業生や大阪・浪花・天満教会員、大阪ステーションの宣教師が教員の基本枠を占めることになる。左乙女は先述した聖公会系大阪英和学舎の教師であり、そこから流れてきた生徒も多く、泰西学館は、消滅した英和学舎の後継としての側面を有していた。

当初より校長は宮川で一貫していたのに対し、教員陣は、入れかわりが頻繁であった。宣教師についてみると、コ

ルギー (Colby, Abby M.) も含め、伝道活動との兼ね合いが難しく、一八八九年十月に専任の教師、ダニエルス (Daniels, Mary B.) が派遣されることで、安定的な英語教育が行えるようになったようである。なお、北越学館を退き、いわゆる不敬事件で第一高等中学校も辞した後、内村鑑三がこの学校で教えていたことはよく知られている。彼は一八九二年九月から翌年五月まで在任したが、宮川校長と対立して辞職し、今度は熊本英学校に移っていった。茂も推測するように、このような教職員の流動性や、宮川校長が大阪教会牧師・梅花女学校校長でもあり、必ずしも泰西学館校長職に没頭できない立場にあったことは、学校のもろさの一要因であつたろう。

中之島の校舎が台風で倒壊したため、一八八九年には曾根崎へと場所を変え、三百名規模の教室と五十名弱収容の寮とを有する校舎へと拡大された。総工費二千七百円は、地元での寄附でまかなわれている。この時期の学校たるもの、総じて生徒の転出入が激しいため総数が把握しづらく、泰西学館も御多分にもれないが、一八八九年四月の時点で、この一年間は百三十五名の平均出席者があつたと報告されている。その後は激減の途をたどり、一八九二年三月末報告の平均出席者は六十四名と、経営をひどく苦しめることになる。一八九一年十一月の時点で、すでに八百円以上の赤字があつたことは確実である。

さて、泰西学館の教育目的はどこに置かれていたか。創設趣意書や学則・カリキュラムの類の史料が発見されていないので、断片的事実から類推するしかない。この学校では英学・漢学・数学の三教科が教えられたが、「正則英学を教授する傍ら漢、数学を教授」する点で、英学教育が中心であり、音読会話作文などを外国教師が教授するという語学教育の充実が学校のアピールポイントであつた。¹⁶⁾ 一方で、この学校が英学校とすら名乗ったことがなく、最初から泰西学館と称したことは、単なる語学の学校ではないという意気のあらわれであろう。普通科の修学年限を五年と定めているのは、一八八六年四月の中学校令で定められた尋常中学校制度を意識したものといえるが、一八八九

年十一月段階で、「高等普通学」教授を掲げ、専門諸学科の教師も置いていた点⁽¹⁸⁾は、尋常中学校どころか高等中学校レベルをも射程に収めているように思われる。哲学及文学教授にJ・T・ギュリック、文学及び語学がダニエルス、能弁学及音楽オルチン、生理学に小林山郷、漢文に近藤元粹、英文学に松浦政泰と左乙女、理学に中瀬古六郎、漢文学に菅文次郎、英語学川口森、数学菅原源三と辻一雄、といった教師陣を揃えているが、このうち小林は医学士で、大阪専門学校（大阪英語学校の後身、第三高等中学校の前身の官立学校）の出身者であった⁽¹⁹⁾。入試の有無や程度は不明である。

一方、カリキュラムにキリスト教の科目が組み込まれていたことは確実であろうが、それが具体的にどのようなものであったかは残念ながらわからない。だが、一八八九年には二十三名、すなわち生徒の十五%に当たる受洗者を生み出していた。彼らにより夏期伝道隊が組織されることもあった。

一八八九年から一八九二年の間に生徒が激減し、泰西学館がいわば成功しなかった理由を、茂は保守反動という時代性に求めている。そうした時代にもかかわらず、「質・量ともに公立を含めて大阪一」という学校像を描き、例えば三百名収容という大がかりな校舎設計をしたこと、実益性の薄いリベラル・アーツの学校としたことなど、いわば関係者の判断ミスがあったと理解している。要するに財政規模上無理のある経営が行われ、カリキュラムも社会のニーズに合わなかったとされているのである。たしかに、後に見る岡山の薇陽学院や熊本英学校と比べても、想定された学校はかなり大がかりなものである。

ではなぜ、宮川校長らにそのような読み違いが起きてしまったのかを考える必要がある。一八九八年二月一日に閉校を決定するまで、総じて低調な学校としての歴史を歩むことを余儀なくさせた初期の目測誤りの背景には何があったのだろうか。

まずそれは、一八八六年四月の中学校令による高等中学校制度の開始と大阪における第三高等中学校の発足、そして同年十一月三十日をもって、大阪の第三高等中学校の京都移転が決定的となり、一八八九年九月に完全移転が行われたことと無関係ではないと考えられる。

泰西学館が開校直後の一八八六年十月には「塾舎狹隘」につき移転、夜学校も開くという盛況ぶりをみせたのは、⁽²⁰⁾地元子弟の多くが、高等中学校への進学予備教育すなわち質の高い英語教育を求めたからであろう。そして、第三高等中学校が京都へ去ることで、泰西学館は進学準備校としての集客力を失うことになった。

ところが第三高等中学校が大阪から消滅することをうけて、泰西学館サイドは、これに匹敵するレベルのカリキュラムを改めて構想した。先ほど述べたように、「高等普通学」教授を掲げ、理学などの専門教師も置くことを掲げた生徒補充募集の広告が、一八八九年十一月という第三高等中学校の京都移転直後に掲載されたのは象徴的である。おそらく大阪に第三高等中学校があり続けたならば、泰西学館がこのような大がかりな規模やカリキュラムを構想することはなかったと思われる。泰西学館は、大阪における第三高等中学校の後釜としての地位をイメージしたのではなかろうか。

そもそもアメリカン・ボードの大阪伝道自体が、第三高等中学校の前身である官立学校そのものを不可欠の存在として成り立っていたが、第三高等中学校の発足と移転は泰西学館の命運を握り、これを翻弄することとなったのである。⁽²²⁾

続いて、泰西学館と同志社との関係について考えよう。最初に大阪で“boys school”を始めたときから、大阪ステーションの宣教師たちには、京都への対抗的な意識があった。キリスト教界で志を立てた大阪の若者は、同志社に旅立ってしまうのが常である。ハイレベルな官立学校の存在ゆえに前途有為な若者が集結する大阪において、独自

の学校を作りたいというのがレヴィットらの夢であった⁽²³⁾。であるから、設立された泰西学館は、同志社で学んだ者が教鞭を執り、同じキリスト教の空気が流れているということはあるが、同志社に人材を送り込もうという意図はなかったし、同志社の援助の下につくられたという意識もなかった。教員内村鑑三が、学校の規模や後援者の力はさておき、真なるキリスト教精神という一事においては、「あえて同志社とすら比較することを辞さない⁽²⁴⁾」と表明したことは、この学校の同志社への競争的意識の存在を示すものであろう。

このように、かたや第三高等中学校を、かたや京都の同志社を意識して自己形成したことが、大阪・泰西学館の性格を規定し、また、自らを窮地に追い込むことになったといえよう。

2 薇陽学院^{びよう}

岡山の薇陽学院については、竹中正夫や守屋友江の論考において言及があるが、ほとんど明らかになっていない。本節では新出史料を用い、この学校について検討する。

岡山ステーションは、一八七九年にベリー (Berry, John C)・ケーリ (Cary, Ois)・ペティー (Petree, James H.) が家族とともに赴任して開設され、翌年には岡山教会が設立された⁽²⁵⁾。ケーリやペティーは、旧藩主池田家の資金をもとに創設された池田学校に英語教員として雇用され、岡山居住を果たしていたが、彼らの着任とほぼ同時に、池田学校とは別の岡山英語学舎なる組織が立ち上がったようである⁽²⁷⁾。しかし当初は校規もなく、見るべき存在ではなかった。一八八五年頃になって設立された基督教徒中国青年会が、その活動の広がりのおかげで岡山英語学舎を譲り受け、青年会英語学校とした。ケーリやペティーによって毎日一、二時間の英語教育が恒常的に行われるようになり、生徒数は八、九十名に上った。とはいえ、いまだいわゆる私塾に過ぎなかったが、一八八九年の初夏になって、男子普通学

校設立の議が起こり、岡山教会の牧師である安部磯雄や小野田元に教則の編成や教師の招聘が一任された。そして、同年九月、ついに岡山英語学校の開設にいたったのである。

県の公文書が残っており、確認は不可能であるが、ここで教員や規則を確定して正式に県に学校設置を申請し、私立学校として認定を受けたということになる。設立者は岡山教会の丸毛真応、校長は安部磯雄、当初の教師は平子貞誠・児嶋亀士・霜山懋爾およびアメリカン・ボードの宣教師ペティーとローランド (Rowland, George M.)、会計は中堀直秋、幹事を小野田が務めた。理事会に相当するような運営組織の存在は不明である。英語学舎発足当時から校地は市内の山下であり、一八九二年に網浜へ、そして一八九四年五月に東山偕楽園内へと移動したようだ。

泰西学館同様、学校の経営は厳しかったようだ。期待されたほどの生徒数が集まらず、寄附金が減少し、設立年の十二月には教員の児嶋を解雇するなどしてどうにか維持したもの、一八九一年夏には二百円余の負債を生じることとなった。同時期の泰西学館の赤字ほどではないが、地元からの寄附金と授業料のみではどうしても不足が生じた。また、人事の不安定さを抱えていた点も泰西学館と同じである。安部はこの年より留学し、同じく留学を志した平子は、安部の説得によって留まり学校の核となったが、病を得て去り、もう一人の中心人物、小野田も伝道地京都へと旅立った。その他の教員陣には、津田鍛雄、山下虎之助、広川友吉、山崎直、守田幸吉郎、石田祐安、岡山孤児院の古藤重光などの名が挙がるが、いずれも短い任期であった。また、ケリー、ペティー、ローランド、ホワイト (White, Schuyler S.)、アダムス (Adams, Alice P.) ら、岡山ステーションの宣教師が相次いで教師を務めた。岡山は居留地ではないから、彼らが岡山居住の根拠を得るためにも雇用契約の必要があったといえる。

創設当初のカリキュラムと同じかどうかは留保が必要であるが、一八九四年段階での薇陽学院概則や学科課程表が残っており、貴重である。ここでは、「本院ハ高等小学科ニ連接シテ高等普通学科ヲ授ケ直チニ実業ニ従事セント欲

スル者若クハ尚ホ進ンテ高等専門ノ学校ニ入学セント欲スル者ニ必須ナル教育ヲナス」ことが目的に掲げられており、尋常中学校レベルの教育が念頭に置かれていたことがわかる。

英・漢・数の三学科、特に英学科を重視し、私立学校であるにもかかわらず「堪能ナル外国教師三名ヲ有セハ其進歩頗ル著シ是レ本院入学者独特ノ便宜ト云フ可シ」⁽²⁸⁾と言える点、泰西学館同様、学校の売りであった。岡山英語学校改め薇陽学院と名乗るのは、一八九二年一月のことで、実際は普通学校であるところを英語学校と呼ぶのは不都合との判断からであった。

課程は本科三年、高等科二年で、本科入学以前に一年の予備科も置かれていた。正科五年のカリキュラムは尋常中学校と一緒だが、高等科・予備科の区別は、尋常中学校制度にはないものである。高等小学校卒業者は予備科に無試験で入学することができ、本科入学には漢・英・数と作文の試験があった。高等科は本科卒業の学力があれば入学を許すとある。そしていずれも、受験の準備がなければ仮入学が許され、学期試験を経て正科に編入できた。また、正規の課程とは別に、特定の学科のみ学べる選科が設置されていた。

生徒数は三十名から五十名の間で推移した。⁽²⁹⁾岡山英語学校としての発足時の入学応募者は五、六十名、試験により入学できたのは半数といい、当初は高いレベルの学校が目指されていたわけであるが、理想と現実とのほごまにあつて、生徒数確保のために、能力のおおつかない生徒に対する仮入学のシステムが採られるようになったものと思われる。

キリスト教教育についてみると、予備科・本科の「倫理」科目として、毎週一時間「聖書講義或ハ徳育上ノ講話」が施されていた。⁽³⁰⁾高等科にはこの科目はない。東華学校には週二時間の「修身」科目として「講話」が設けられていた⁽³¹⁾ので、それに比べるとキリスト教色が薄くもみえる。しかし、学校の性格は、キリスト教、さらにいえば同志社色

の強いものであった。

関係者は、「余数年京都同志社ニ遊ビシ者而シテ英学勉強ノ便宜ニ至テハ或ハ彼レ之レニ若カザル者アルヲ⁽³²⁾覚フ」と述べ、薇陽学院では同志社と同レベルの英学教育が施されているとの認識を示していた。しかしこれは、泰西学館のように、同志社に対抗しうる同等の学校という意味ではない。宣教師は、岡山英語学校を、同志社の“fitting School”、すなわち同志社への入学準備のための学校と捉えていた。⁽³³⁾ 実際、先の引用は「怪ムナカレ本院ニアツテ二年若クハ三年ノ勉強ノ后チ同志社ニ至ル者ガ能ク相当ノ級ニ入ツテ敢テ下ラサルヲ」と続くことから、中途で学校を離れ京都の同志社に向かう者が多かったのである。また日本教員陣は、ほとんどが同志社の卒業生であつた。⁽³⁵⁾

薇陽学院が一般の進学予備校的な機能をどの程度果たしていたかは不明である。早稲田の前身、東京専門学校⁽³⁶⁾の英語専修科に入学した正宗白鳥が薇陽学院に学んだ経験をもつが、彼はすでに徳富蘇峰に惹かれ、キリスト教への関心をもつて入学したのであり、在学中にも内村鑑三の著作に感銘を受けている。⁽³⁶⁾ 薇陽学院が閉鎖されたので、東京専門学校に入学するが、具体的な進学目標があり、その受験準備のために薇陽学院に学んでいたというわけでもない。彼は、この学校はキリスト教の伝道目的の学校であると認識していた。

岡山は大阪同様、高等中学校の設置地であり、分科としての第三高等中学校医学部が一八八八年四月より授業を開始しているが、大阪の第三高等中学校と泰西学館のように、薇陽学院の運命を左右するほどの関係は生じていなかったと思われる。

公教育の進展などの影響により、薇陽学院は泰西学館より早い一八九五年十二月に閉校し、生徒は東京へ、あるいは同志社や神戸近辺のメソジストの学校（すなわち関西学院）⁽³⁷⁾に入学した。校長を務めていた安部も東京へと去るが、同じく組合系の日本人教会員によって同時期に発足した泰西学館と薇陽学院とは、地域社会において担う役割を⁽³⁸⁾

いかにイメージしていたかという点で、かなり異なる性格をもっていたといえるだろう。

3 熊本英学校

熊本英学校の実態も、それほど明らかにはされていない。日本側史料の不足に加え、「英学校事件」とも呼ばれる思想弾圧事件の印象が強く、関心がそこに集中してしまったという研究史上の問題もあるだろう⁽⁹⁾。本稿では、紙幅の関係もあり本格的な解明は後日に委ねることにするが、従来の研究に、アメリカン・ボード宣教師文書などによってあらたに得られた知見を加え、発足経緯や教育目的、地域との関わりなどについて、わかる範囲のことをまとめていく。

一八八二年三月以来、同志社を退学後帰郷した徳富猪一郎が主宰していた大江義塾は、徳富の上京を機に、一八八六年九月で閉校となったが、この年より、日本基督教伝道会社の伝道師として同志社出身の奥亀太郎が熊本に派遣され⁽¹⁰⁾、同窓の山田健三郎・西山亀次郎の助けにより教育活動を開始した。一八八七年六月十一日、幹事に熊本新聞主宰の徳永規矩や浜田康喜といった地元の協力者を得て、同じ大江の地に熊本英語学会が発会した。九月になると海老名弾正が熊本に赴任し、奥から会長を引き継いだとみられる。アメリカン・ボードからは、一八八六年にO・H・ギュリック (Gulick, Oramel H.) 夫妻が来熊しており、教員を務めることとなった。翌年より順に、クラーク (Clark, Cyrus A.)・S・J・ギュリック (Gulick, Sidney L.)・バセット (Bassett, Franklin H.) が一家で着任し、彼らも教育に携わった⁽¹¹⁾。当初の生徒は大江義塾に学んでいた者が多かった。

熊本英学校名で県に設置を申請し、認可を受けて正式に発足したのは、一八八八年四月二十日のことであり、校長には海老名が就任した。この頃には、生徒数は百名を超えるほどになった⁽¹²⁾。講義所の度重なる移転とともに、校地も当初の大江から、南千反畑町 (藤崎神社近く)、立町と転々とし、英学校発足時には西外坪井町に置かれ、その年六

月には大江近郊九品寺の演武場跡に校舎を新築したようである。⁽⁴³⁾ 七五〇ドルの建築費は、アメリカン・ボードからの援助を受けず、生徒たちをはじめ日本人側によって準備された。翌年にかけて生徒はさらに増え、百名弱の寮生と、その約半数の通学生が学んでいた。⁽⁴⁴⁾

続いて教育内容をみていこう。英語学舎時代には、宣教師による語学教育に重きが置かれ、バーンズ (Barnes) の “National Readers” が主に用いられていたようだが、熊本英学校は、「小学課程ヲ卒業セシ学力ヲ有スルモノヲ入学セシメ、正則英語ヲ以テ普通学科ヲ教授シ旁ラ普通和漢文ヲ授ケ後來各専門学科ヲ修習シ得ルノ資格ヲ養成セシム」と記し、英語を用いた普通学の教授と和漢文の教育を掲げるようになった。生徒は九州各県をはじめ、中国四国関東方面からも集まっていたという。年限は五年で、一年の予科を併設していた点は、薇陽学院と同じであり、尋常中学校レベルを想定していたといえる。キリスト教の科目がどのようにカリキュラム内に設置されていたかは不明である。しかし、朝は礼拝をもつて開始されており、生徒の多くは日曜学校にも参加していた。⁽⁴⁵⁾

この学校の地域高等教育史上の位置は、済々黌および第五高等中学校との関係抜きには考察できないであろう。

済々黌は、一八八二年二月、国権主義を掲げる政治団体紫溟会によって開校した私立学校である。仙台においては、民間勢力による地域教育を実現する存在として、森有礼文相が新島襄や富田鉄之助の宮城英学校（東華学校）設立計画に協力的な姿勢を見せていた。⁽⁴⁶⁾ しかし、熊本で森が同様の期待を寄せた私立学校は済々黌であり、熊本出身の井上毅、旧藩主家出身の長岡護美、済々黌校長佐々友房、県知事富岡敬明との間に強い人脈が築かれていた。⁽⁴⁷⁾ 熊本においては、キリスト教勢力による学校が森の第一の連携相手ではなかったのである。県立熊本尋常中学校は一八八八年三月末日をもって廃校となり、前年十月、官公立学校と同等の徴兵猶予の資格を認可された済々黌が（同時期の同志社がなかなか得られなかった資格である）、県の中等教育を肩代わりする位置を占めて校勢を拡大した。

宣教師らは、熊本英学校の存在が広く地域に知られるようになり、“the Large Buddhist and anti-Christian school established in Kumamoto”の恐るべきライバルとみなされっていると述べている。⁽⁴⁸⁾これは済々黌を指すと考えられるが、地域や中央の有力者の後押しといった点では、熊本英学校は済々黌にかなうべくもなかったといえよう。

一八八七年五月三十日、文部省直轄第五高等学校の熊本設置が正式決定し、九月から開校した。⁽⁴⁹⁾時期的にみて、熊本英学校の正式発足や生徒数の拡大は、第五高等学校の開校や県立尋常中学校の閉校を背景とした現象であったと捉えられる。だが、第五高等学校への進学予備教育の期待という点では、無試験編入学も可能となる済々黌が県下における優位を保ち続けたことは想像に難くない。⁽⁵⁰⁾

熊本洋学校・大江義塾の時代より、熊本の教育は政治思想の対立状況のなかに展開しており、熊本英学校と済々黌の生徒間では、暴力沙汰も絶えなかったことが回想されている。

日本基督教伝道会社社長となった海老名校長が退任した後、柏木義田が一八九一年一月から校長代理として来熊し、一八九二年一月に米欧留学帰りの蔵原惟郭が着任、閉校まで校長を務めた。蔵原着任の直後に起こったのが、前述の英学校事件である。⁽⁵¹⁾校内の意見は対立し、一八九二年四月には柏木を中心とする一派が分裂して東亜学館が発足、一八九四年に再び合併して九州私学校が発足するものの、一八九六年七月に廃校となる。

このように、地域における熊本英学校は厳しい思想環境の下に置かれていたが、続いて京都の同志社との関係についてみていこう。

一八八八年三月二十七日、新島は海老名校長に対し、「此ノ秋迄ニ御地信徒中ヨリ別課神学ニ入ルヘキチト骨ノアル人物ヲ御見立置キ被下度候、又英学生ノ中ニテモ御送被下候様仕度候⁽⁵²⁾」と書き送っており、京都の同志社の別科神学部に入りうる人材を熊本英学校に求めていた。実際判明する限りでは、一八九一年夏の卒業生十三名のうち、六名

が同志社の英語神学科に進学していた。⁽⁵³⁾ また新島は、不勉強な同志社予備校生、北垣国道京都府知事の息子確を熊本英学校に委ね、「九州之極質朴風ノ御仕立」により鍛え直そうとしている。⁽⁵⁴⁾ 同志社草創期に熊本洋学校から流れてきた諸人材を通し、熊本出身青年に対する印象を形づくっていた新島が、学力以上に気質の面で、熊本英学校に人材供給、あるいは人材養成の期待をかけていたことがわかる。

新島個人との関係の深さという点では、泰西学館や薇陽学院にはるかに勝っていたのが熊本英学校であり、公教育体制と結びついた地域エリートの養成機能が低調な一方で、同志社とのパイプが強い私立学校だったと考えられるのである。

二 福井 —— 地域有力者・日本人キリスト者の学校構想 ——

1 「英語専門学校」

最初に述べたように、福井の学校設置計画は日の目をみずに終わったし、伝道拠点の形成にも結び付かなかった。だが、地域有力者の主導性という点では仙台に劣らぬものがある。

新島と結びつき、学校設立計画の推進者となったのは岡部広であり、その関係の前提となったのは杉田定一⁽⁵⁵⁾の存在である。端的にいつて彼らは、福井県下有数の民権家であった。

後に中央政官界においても活躍し、その名をよく知られる杉田定一は、坂井郡波寄村の大庄屋の家に生まれ、一八七九年七月に福井において学習結社自郷学舎を結成し、翌月には民権政社自郷社を起こした。坂井郡伊井村の秀真家に生まれ、福井藩家老岡部長の養子となった岡部広は、若狭改進黨を組織するなど、士族民権家として活動して

いた。

二人の活動は、一八八二年十二月の南越自由党結党によつて結びつき、同時に創刊された『北陸自由新聞』の社長に杉田定一、幹事に岡部が就任した。だが翌年になると、豪農・豪商階層によつて成る組織自体の限界、言論統制や高田事件など北陸一帯の運動への弾圧もあり、福井独自の民権運動は沈滞化していく。『北陸自由新聞』も一八八三年四月二十二日を最後に休刊となり、杉田は上京して福井から離れる。

福井の有力者である彼らと新島との関わりは、一八八三年八月二十三日、北陸旅行中の新島が福井で杉田に会い、「耶蘇教ノ大切ナル事ヲ説」くとともに、「私立大学ノ発起者トナリ県下ノ募集金等ニ尽力アラン事ヲ乞」うたところからはじまったと考えられる。杉田は八月二十日、板垣退助を招いて大阪中之島自由亭で開かれた関西自由懇親会に岡部と参加しており、ちょうどそこから帰ったところであつた。新島は大学設立運動に賛同し資金提供者となりうる支援者を各地に求めており、杉田家はその有力な対象であつたとされる。事実杉田家には、「同志社英学校規則」(一八八二年六月)、「同志社大学設立旨趣」(一八八三年四月)、「同志社法律専門校創立方見込」(年月日不明、一八八四年春カ)、「同志社大学設立の旨意」(一八八八年十一月十日)、「同志社設立始末」(一九八八年十一月)、「同志社大学義捐金募集取扱広告」(同)、「および本件に関わる新島からの通知書(同)」などが残されており、後年にいたるまで大学設立問題を媒介とした関係は続いていたと思われる。そしてこのうちの一つ、「同志社法律専門校創立方見込」の第三条には、「本校は京都ヲ以テ根軸スル勿論ト雖其範圍ヲ拡張シ大坂滋賀兵庫和歌山岡山福井岐阜三重石川富山ヲ併セテ根基トシ発起人亦右府県下ヨリ専ラ募集セントス」(傍点筆者)と記されていた。

杉田自身は一八八六年七月から一八八九年六月まで欧米周遊の旅に出かけたが、その間も新島との交流は続いた。杉田の妻鈴は、夫の不在中、病弱な長男の養育目的も兼ねて京都に赴き、高等小学校訓導を務めるかたわら、新島の

深い配慮を得、同志社での英学研究を実現した。⁽⁶²⁾ かつて新島から洗礼を受けた京都府会議員の大沢善助の世話にもなっている。定一は妻をよろしくとの書簡をロンドンから新島に書き送っている。⁽⁶³⁾

一方、福井における学校設置の動きは、ちょうど杉田不在中の出来事であり、彼の代わりを果たすかのごとく、その中心人物となったのが岡部広であった。一八八三年の福井訪問時に新島が寄宿したのは「岡部家」であるが、二人が会うことはなかったようである。杉田から話は聞いていたもののずっと失礼していたと詫びつつ、岡部が初めて新島に接触を図ったのが一八八六年十二月である。⁽⁶⁴⁾ 地元福井に関する「弊地方ノ如キ開明其度ニ后レ教育ニ物産ニ将来一モ進歩ノ目的無御座」「弊県ノ如キ蒙昧退歩ノ民度」との認識を披露し、現状を変えるべく、新島に「米国人ニテ徳育熱心ノ良教師壹名御厚配ノ上、一時御指向」を依頼する手紙を送ったのであった。教師の招聘は「杉田在國中モ兼テ計画仕候へ共時機未タ会セス甚タ苦慮」していた案件であったが、自分も県会議員を二、三年務め議員中に多くの同志を得ることができたため、いよいよ計画を実現すべく始動したという。岡部は一八八二年に一ヶ月ほど県議経験があつたが、一八八五年五月に再選されてから本格的な議員活動を開始し、この年九月の臨時県会からは副議長を務めていた。「滔々たる弁舌をもつて大上段に構えた演説は、他の追隨を許さぬ」⁽⁶⁵⁾ 議員であつたといわれている。

岡部の新島への働きかけの直接的なきっかけは、同月一日に閉会したばかりの福井県通常県会であつたと考えられる。一八八六年四月に発布された中学校令第六条は、地方税の支弁または補助による尋常中学校は各府県一ヶ所に限ることを命じるものである。福井県には、福井に中学校が一校あり、小浜にも師範学校を兼ねた中学校が一校置かれていたが、中学校令により一校にしばらなくてはならなくなった。県会では、小浜の中学校費削除の代わりに、新たに「小浜英語学校」の費目が設けられ、二千円余の予算案が示された。要するに、中学校令と地域的な学校の権衡に配慮し、小浜には中学校ではなく県の英語学校を新設するという方策であつた。しかし常置委員会は、これだけの予

算では十分な学校は設置できないとして全廃説を提示し、これを支持する議員が多数を占めた結果、小浜英語学校費は否決されたのである。だがその後、あらたにこれを福井県英語学校として設立する建議案が上程され、小浜設置を前提とせず、福井を含め県下のいずこへ設置すべきかが議論となった。当今の時勢を見るに、条約改正も近く、内地雜居も允許されそうな景況なので、洋学の必要は共通理解であるとして、全県の見地からの英語学校設立の必要が述べられたのである。⁽⁶⁷⁾ 結局これは実現しなかったが、岡部は、時勢判断に基づいた議員間における英語教育必要論の高まりをみて、機が熟したと判断し、新島に外国人教師斡旋をもちかけたのではなかろうか。

岡部は前述の書簡を送った後に京都の新島を尋ねたが、その後に計画は、教員派遣に止まらず学校の設置へと飛躍する。学校設立は、岡部がひそかに抱いていた思いなのか、新島からもちかけたのかは、残念ながらわからない。ちょうど東華学校の前身、仙台の宮城英学校が設置されたばかりであるから、あるいは新島側からの促しがあったのかもれない。いずれにせよその具体像は、一八八七年一月の新島宛書簡⁽⁶⁸⁾と、そこに添付された「私立専門学校設立移文」⁽⁶⁹⁾（以下「移文」と略）によって知ることができる。両史料により、この学校設置計画の具体的な内容をみていこう。

「移文」には、学校設立の理由として、県の中学校があるが卒業生が高等中学や専門大学に進むような状態ではないこと、専門学こそが書生にとって最後は必要な学であること、遊学の便と資力とが両立せずついに地方にて小成に止まる者が多いことが挙げられている。当初、専門学として経済と法律を教授する専門学校が想定されていたようであるが、発起会で経済や法律は削除し、必ず「英語専門」の学校と命名する予定であることが注記されている。

創設仮事務所は福井文学舎に置き、これを改良して私立専門学校にするとしている。福井文学舎は、すでに一八八二、三年頃に市中に設置され、皇・漢学の他に算術・英語を教え、最盛期には百七、八十名の生徒が学んでいた⁽⁷⁰⁾。この地元私塾が専門学校の土台に選ばれたのであった。

資本金に関しては、一年に約千四百四十円の経費がかかるとし、生徒百五十名による十ヶ月間の月謝五十銭で七百五十円を賄い、残りの六百円は県下七郡からの義捐金募集が計画されている。元貨として七千円余が必要であり、不景気の下ではあるが、同朋四十万の協心をもってすれば不可能な数字ではないと見通している。月五十円を「米國博士」二名の「慰労料」にあてるとし、このような僅かな金額にもかかわらず「精心一到」、四月か五月には彼らの招聘を実現するので資金の募集を急ぎたいとして、この「移文」を締めくくっている。

後便をもって追加分を報告するところがあるが、「発起同盟者」としてとりあえず「移文」に名が挙がっているのは三十四名であり、地域的には福井を中心とする嶺北地帯（足羽郡・吉田郡・丹生郡・今立郡・南条郡）の有力者から成り立っていた。

最初に福井文学舎員である山口透（漢学者）・玉村敏弥・渡辺環の名が記された。県会関係者は十名おり、県会議長の永田定右衛門に始まり、黒田道珍・山村貞輔・山本喜平・野尻東内・青木春平・奥田与兵衛・渡辺次一・加藤与次兵衛・大友茂兵衛の名がみえる。岡部を含め、議員定数三十六名の約三分の一が賛同しているが、やがては過半が調印したという。⁽⁷⁾ よって地方税をもって校資を補助することも難しくないかもしれないと岡部は期待している。

また、「発起同盟者」のうち、戸長職にある者が、玉村敏弥（前出）、児玉権十郎、矢部藤左衛門、松谷弥男、内田開三郎、久保久兵衛、⁽⁹⁾松原勘右衛門、堀口弥一郎の八名である。戸長については、旧藩政下には地方に大きな勢力を有した大庄屋等であること、県官ではないので発起人に加入させたことが注記されている。こうした階層を取り込むことについて彼は、「弊地ハ御承知ノ如キ国柄ニ付先ツ各郡町村屈指ノ者ヲ発起者ニ相ヒ加ヘ」なくてはならないと説明しており、「杉田老人」すなわち杉田定一の父仙十郎も加わるであろうと報告している。

福井の市街からは福井新聞社長の山本鏘二、職工会社取締役の岩村繁介、丹生郡長の内田徹、福井組合代言会長の東

郷龍雄、代言人の笹倉鍊平と牧野逸馬、桑産会社取締の打野文次郎、福井織物会会長の富田循良、金子伝吉が名を連ねる。その他、南条郡武生の医師増田耕次郎、今立郡の飯田上祐、宇野甚次郎、木津群平、丹生郡の島勝応の名が挙がつっていた。

岡部は京都を尋ねた折、グリーン (Greene, Daniel C.) と交流したようである。グリーンは南北戦争における義勇兵体験、あるいは福井藩のお雇いであったグリフィス (Griffs, William E.) との親交が、地域への有効なアピールになると捉えたものか、「移文」には、そのことが延々と紹介されている⁽²²⁾。

福井の織工会社が「大ニ奮発」しているのは、アメリカへの織物輸出が近年増えていることで親米的な感情があり、地方のために文化を入れることに関心が深い人々だからだと述べている。岡部は、福井のキリスト教信者は必ずこの中から起こってくるだろうと予想しているが、新島に対しては、地元が「大ニ奮起スル」ためには、「今回ハ米国人ニテ宗教一片ノ人ニアラス傍ラ有志ノ人ヲ願上度」と頼んでいる。彼には、キリスト教色が前面に出ることへの警戒があったといえる。

こうした岡部らの熱意にもかかわらず、計画ははかどらなかつた。県下各地、「英語学校」設立自体を不可とする者は一人としておらず、一時は商工会議所が臨時会を開くほど「人氣盛」であつたが、⁽²³⁾ 実際に金の問題となるとまらな⁽²⁴⁾い。困難の背景には、敦賀港から武生までの新道建設寄附金募集事業とのバッティング、「英語学校」が設置されれば県中学校は不要ということかという県学務部からの苦情、東本願寺執事渥美契縁の来福を契機とした仏教勢力からの妨害もあろうと分析されている。三月から四月にかけて、岡部は新島に詫び状や釈明を書き送り、計画は宙に浮いた形となつた。

一八八七年の年末に岡部は、通常県会が西洋人一名を福井県中学校に雇い入れることを決定し、予算百五十円を計

上したことを新島に報告した⁽⁷⁵⁾。すでに五月頃には、学校設置をひとまず断念する代わりに、当初の予定通り、新島の息のかかった外国人教員を福井県中学校に雇用する方向に目標を定めていた岡部であった⁽⁷⁶⁾。彼は県知事の石黒格や書記官に話を持ちかけ新島に人選を依頼する旨を伝えていたが、県会に際して、あらたに「学校監督等二経験アリ学術アル同志社長」への依頼に対する常置委員五人全員の賛成を得、知事に掛け合った。以前の「私立英学校」計画に対する県議・戸長・有志家からの幅広い支持に言及し、仏教勢力の反発を警戒する知事に安心感を与えた。常置委員の時岡又左衛門、書記官の本部泰、そして石黒知事でさえも、娘を新島に委ねようと述べたという。三月には石黒知事が新島を尋ねることも予定された⁽⁷⁷⁾。

だが結局、一八八八年五月一日から月俸百三十円で雇い入れられ、英語科および文学科の教授を行った外国人は、帝国大学総長渡辺洪基が石黒に推薦したアメリカ人ハルコム (Halcom, N.W.) であつた⁽⁷⁸⁾。渡辺は福井県武生の出身であり、結局は地元出身の帝大総長とのパイプの方が、岡部を通じた新島への関心にまさったということになる。

同年十一月からの通常県会では、士族勸業派の領袖として勸業費大膨張を図った岡部に、永田議長を初めとする反勸業派が抵抗して対立、暴行事件にまで発展し、内務大臣により県会が解散処分を受けるといふ異例の事態となつた⁽⁷⁹⁾。解散直後に県議が改選されたが、岡部は引退した。このように、かつて学校設置計画に同調した県議同士が鋭く対立し、岡部も県会内での力を失った以上、もはや新島と結びついた構想が息を吹き返す余地はなくなつたといえよう。帰朝した杉田が県議に当選するが、構想が引き継がれることはなく、約二年間の運動は終わりを告げた。

なお全国的に通常県会の会期である同年十二月、新島は各県の県会議員に対し、大学設立の旨趣書を添え、「中央本部」を設けて「貴県全管内ニ広く有志賛成家ヲ御募り被下」と依頼する書状を作成しており、福井県に關しては、議長の永田定右衛門と副議長岡部の名を記している⁽⁸⁰⁾。福井県会ぐるみの新島支援計画も、勸業問題をめぐるこの対立

と混乱で不調に終わったとみえ、「赤面至極」と新島に詫げる岡部の書状が残っている。⁽⁸¹⁾ただし二人の関係は、新島の死の直前まで続いた。⁽⁸²⁾

2 「同志社分校」

以上のような顛末で、岡部が主導した福井での「英語専門学校」設立構想は、新島の推挙する外国人教師派遣計画も含めて潰えたが、それと入れ替わるかのように、一八八八年十二月、新島と関わる別の学校設立計画が福井において持ち上がることになる。それは、大阪・岡山の動きと同様、日本人キリスト者によるものであった。

福井伝道は、一八七九年頃に本間重慶によって端緒についた。⁽⁸³⁾本間の伝道は不調に終わり、まさに立ち去ろうとする前日、神戸の商館に奉公し入信した松浦喜之助という人物が偶然帰省してきて彼を訪ねた。この出会いの後、松浦は福井にとどまり、自宅を直して講義所とし、聖書販売を始める。一八八三年八月、北陸巡遊の途次に福井を訪ねた新島は、彼の店で演説をしている。⁽⁸⁴⁾松浦は後に神戸に戻り商業活動に従事するが、福井の自宅は伝道のために捧げた。⁽⁸⁵⁾また、一八八二年の夏季伝道でこの地を訪れた同志社神学生井出義久との出会いを経、一八八四年十一月に同志社に入学、翌年第二公会で洗礼を受けて帰福した元福井藩奉行の松原孫七郎が、伝道師として活動を始めていた。⁽⁸⁶⁾

一八八八年十月十五日、松原に加え、日本基督伝道会社より常住伝道師として大宮貞之助（季貞）が新たに赴任した。二十日には伝道会社から村上俊吉も出張し、松浦邸を増改築した新会堂の捧堂式を行った。来会者は百余名、同夜の説教会にも同じぐらいの聴衆が集まったという。翌日夜の説教にも四十五名が集い、翌日から六日間の連夜祈祷会には一夜平均十六人参加という状況であった。⁽⁸⁷⁾さらにこの月下旬になると、櫻洲義塾と名乗る英学塾が早くも開かれ、小学校・中学校の生徒が二十名余り集まるようになった。これらは明らかに大宮の赴任が契機となっており、彼

が進めた計画であったといえる。

新潟は与板出身の士族、大宮貞之助については、すでに長岡・新潟伝道や京都伝道をはじめとする多くの事跡が、先行研究によって明らかにされている。⁽⁸⁸⁾ 彼は一八八〇年から一八八六年に同志社で学び、一八八二年に京都第一公会でラーネッド (Learned, Dwight W.) から洗礼を受け、第二公会を経て、一八八七年六月には大阪浪華教会へと転会した。大阪では英語を教える機会が多かったようである。ラーネッドの新約聖書口述を筆録し、一九〇五年からシリーズとして出版したことがよく知られるが、本稿との関係でいえば、一八八七年五月に J・T・ギュリックの “English and Japanese Conversations” を和訳し、『正則英和会話大全』として刊行していることが注目される。⁽⁸⁹⁾ これまで着目されなかった大宮の手になる本であるが、福井で始めようとする英語教育に関し、それまでに蓄積された彼の能力を物語るものである。

櫻洲義塾をさらに発展させるべく、一八八八年十二月に作成されたのが、「同志社分校設立伺書」と題する新島宛の趣意書であった。⁽⁹⁰⁾ 大宮貞之助・吉田小四郎・角野房吉・角野幸吉・佐藤彦三郎・佐野影規の六名が「發起人」、大宮と吉田が「編制委員」とされている。吉田は後に、新潟県五泉や新津で牧会活動をした伝道師であり、大宮・吉田以外の人物は、おそらく祈祷会や聖書会読に参加してきた福井市中の商工業者層であろう。角野幸吉は小間物を商い、佐藤彦三郎は魚商で、後に商工業者の有志団体・福井商人会の委員も務めた人物であることが確認される。⁽⁹¹⁾

「基督教基礎ノ学校ヲ設立」することこそが、間接的に伝道上の好結果を得るための方策である。そして、信徒であるかにかに関わらず、「品行方正」を求めて「同志社学院」に子弟を入学させたいという父母を見かける。櫻洲義塾創設のきっかけはそこにあったが、現在は、放課後の不十分な教育しか行えていないため、寄宿生を募集して本格的な学校を設立しようというのが、「同志社分校設立伺書」の趣旨である。⁽⁹²⁾

具体的なカリキュラムやテキストなどは示される段階になく、櫻洲義塾の教育範囲を超え、英語だけでなく、泰西学館や薇陽学院のような普通学と称される諸科目の教授まで考えられていたかどうかは定かでない。だが、この時点でとりあえず念頭に置かれているのは語学教育であったとの印象を受ける。

彼らは、福井県下の教育環境も、学校設立への追い風になっていると考えていた。一つには、福井県中学校の低迷である。春にようやく雇ったアメリカ人教師が、次の三月にはもう退職する予定であり、彼らの目には、中学校が「大ニ衰微」、「其生徒等最早望ミナキニ至ルト煩ヒ居ル有様」と映った。この辞める教師とは、前出のハルコムのことであろう。⁽⁹³⁾

一方、武生の有志者が大阪のチングに学校設立を依頼したが辞退され、失望しているとの情報も彼らの耳に入っていた。チングについては、泰西学館に関連してすでに述べたが、一八八七年に英和学舎が東京に移転したことをふまえ、手の空いた彼の力を借りようとの動きが武生に生まれたのであろう。大宮ら発起人は、こうした人々こそが、計画する学校の「社員」となり、地方子弟の入学につながることを期待していた。

教育をめぐる地元のこのような状況から、学校設立は「非常ノ急要」であるとされ、「思想堅固ナル人間ヲ産出シ此人ヲ以テ直接間接ニ伝教セシメタル」ことが目指されていた。それが当県の幸福であり日本国の幸福にもつながるというのである。さらに、「当校卒業生ヲシテ御社学院ノ大学校ニ入学スルコトヲ得シメ賜ハバ何ンモ言フベカラサル幸ヒ」と締めくくっている。新島が大学設立運動に奔走していることをふまえ、いずれはそこに卒業生を送り込みたいと述べるのである。ただここでの新島への依頼は、具体的な人材派遣や参画という段階ではなく、まずは「賛成保護」であり「設立ノ確答」なのであった。

この「同志社分校」設置計画は、今のところ、岡部を中心とした地域の運動との連携は確認できず、その後の動き

もわからない。大宮は一八九〇年十月に福井を去り、日本伝道会社から次なる伝道地として長岡を示される。大宮が福井を離れたことでこの計画も消えたと推測されるが、地域における日本人クリスチャンの学校設置活動、特にそれに「同志社分校」という名を明確に与えた事例として特記されるものであろう。

おわりに

以上のように、大阪の泰西学館、岡山の薇陽学院、福井の「英語専門学校」および「同志社分校」設置運動の実相を検討してきた。はじめに述べた問題関心と照らし合わせて、これまで明らかにした事実から何がいえるかを考えてみたい。

男子英学校に関し「同志社分校」との概念を当事者が使用している事例は、冒頭で触れた新島の東華学校に対する一言を除けば、福井における大宮貞之助らの伺書のみである。福井という地域、一八八八年十二月という時期、という限定性は考慮せねばならないが、とりあえずこの語に込められた意味を汎用的な指標にして、全体を眺め返してみよう。

大宮らが、構想する学校を「同志社分校」と表現したのは、ひとつには新島のお墨付きを得、その名前・協力の下に学校設立を進めたいという気持ちのあらわれである。そして、キリスト教を基礎とする学校として品行を重視し、伝道上の好結果につなげるという、同志社同様のところざしの発露である。さらに、やがては卒業生を京都の同志社本体に進学させ、同志社への予備校的な役割を担いたいとの展望の表明である。先ほどの論証から引き出せるこれら三点をさらに凝縮すれば、「同志社分校」の含意は以下のようになる。

① 新島の協力を得た学校

例えば岡山の薇陽学院は、教員の出自や生徒の進学、カリキュラムなどに関して、同志社との関係は深く、しかもそれは肯定的である。だが、すでに教会が設置され、その教員が主導する学校である限り、「同志社分校」とは認識されていない。「同志社分校」の意識は、いわば伝道が始まったばかりの土地において、新島襄という具体的な人物に関わりが求められることで生じるともいえる。その究極の形態が、新島自身が校長に就任するという東華学校のケースであったといえる。

「はじめに」で述べた本井の研究も、おそらくこの発想を含む。新島という個人との関わりの下に設立が構想された各地の学校を指して「同志社分校」と呼称しているのではないだろうか。福岡・東京・仙台・新潟・福井——新潟については別の解釈が必要であるが、本井が列举した具体例はほとんどがそうである。⁽⁹⁴⁾

② 同志社の精神を共有する学校

この含意に連なるものとして、そもその発端である新島の言を再度思い起こそう。新島は東華学校について、「教主ハ基督教を信せされ共皆大賛成、学校之主義ハ同志社ト一様ニ有之候間、同志社之分校と申も不苦と存候⁽⁹⁵⁾」と記している。新島にとっての「分校」とは、まずもって、この②の意味であった。キリスト教主義という点における同一性に、「同志社之分校」の要件が求められていたのである。同じ水脈が流れているというイメージであったとでもいえようか。

③ 同志社進学の予備教育校

「はじめに」で言及したように、守屋友江は同志社への「供給装置」(“feeder”)の位置にあった岡山の学校を、「分校」と訳すことをためらった。しかし同時代人の大宮の用法では、同志社進学の予備教育機能をもつことをもって、英学校を「分校」と表現することもあった。

以上のように、「同志社分校」は、複数の意味合いを有することばとして当時から存在しており、それこそが、同志社という教育運動体の発展のあかしであつたともいえよう。

なお、「分校」の発想はひとり同志社だけのものではない。一八七三年から翌年にかけて、同志社創設に先駆け、慶応義塾の「分校」が大阪・京都に設置され、一八七五年には大阪「分校」が移転し徳島「分校」が発足した。⁽⁴⁾慶応義塾の「分校」は、上京することの難しい地方学生の便宜を図ることを動機として設置されており、教員は東京の本校（本塾）から出張、また「分塾に入社する者は、便宜に由て東京の本塾に移り、或は本塾より分塾に移るも勝手たるべし」という規則を含むものである。その点で、東京の慶応義塾の「分教場」とでもいふべき性格が強かつたと考えられる。約十五年後に設置が活発化する同志社の諸「分校」は、地域の特性に対応した各組織の独立性という点で、慶応のそれと異なるものとなつていたといえよう。慶応義塾「分校」は長続きしなかつたが、徳島のそれは地元の民権運動との関係もかいまみえ、同志社「分校」にも相通じる形態として興味をひく。

また、慶応義塾以外にも、大阪の官立学校が一八八五年七月の改組により、東京大学に対する「大学分校」との呼称を一時与えられていたことも、比較検討の対象になるであらう。

次に、学校設置計画にあつたの地域側に関する問題を考察しておきたい。一つには非信徒である地元有力者の特性という点から、もう一つには、公教育の影響という点から論じていこう。

一八八〇年代後半の地域において何よりも求められた教育は、エリートの進学予備教育として実効力のある本格的な英語教育であり、アメリカン・ボードは経費の面からみても、魅力的な外国人教師供給センターであつた。であるからこそ、地域の有力者と新島同志社、アメリカン・ボードとが結びついた学校設置計画が各地に起こることとなつた。福井の有力者、岡部広が進めた「英語専門学校」設置構想は貴重な事例であらう。富田鉄之助という人物を得て、

華々しく開校した東華学校のケースに通じるところがある。⁽⁹⁷⁾ただし岡部は、文相に通じ、旧仙台藩の士族層を牽引し、県の官界や財界との強い協力関係を築くことができた富田のような人材と同列には論じにくい。民権運動を経験した県議という点ではむしろ、一八八〇年代前半に京都府医学校を廃止し同志社に委ねようとした京都南部の府議、伊東熊夫との共通性が想起される。⁽⁹⁸⁾岡部は県議や戸長、商工業者などの賛意を取り付け、県知事や県官の説得にも努めたが、地域官界の有力者が学校の「発起同盟者」に名を並べることはなかった。それが、いわば「半県半民」のプロジェクトとなり、成功した東華学校との違いである。大宮貞之助ら日本人キリスト者の「同志社分校」構想と結びつくことができれば、また違った展開がみられたであろうが、岡部自身、仏教勢力の強い同地にあつて、キリスト教色が前面に出ることをはばかっており、両者が合体した一つの大きな運動が生じることは難しかった。

大阪・岡山・熊本の英学校は、地域の有力者をうまく巻き込めなかった点に、低調さの一因があつた。熊本では、そもそも国権主義的風土の強さから、有力者のエネルギーは濟々鬱に集まつていた。大阪では、後に南海電鉄を創業する大塚家の一族かと推定される非信徒から泰西学館に千円の寄附があつたという事実⁽⁹⁹⁾が目を引くが、こうした階層が主体的に関与した地域の学校設置運動とはならず、行政の関わりもみられず、あくまでも教会という閉じた勢力の教育活動にとどまつた。岡山の薇陽学院も、一八七〇年代後半にアメリカン・ボード宣教師を岡山に招き、県医学校や私立池田学校への雇用を実現させた立役者、西薇山や中川横太郎のような地域有力者の関心を再度得ることはなかった。⁽¹⁰⁰⁾

一八八六年四月の中学校令による中学校制度の改編により、尋常中学校・高等中学校という新たな制度が登場した。多くの府県は、法令に従い地方税支弁による尋常中学校を一校に限らなくてはならない（場合によっては尋常中学校を廃止してもよい）という問題に直面することとなった。福井の場合も、既設の中学校二校を一校にしばらねばなら

ず、これが岡部の「英語専門学校」構想の誘因になった。県下中等教育体制との関係という点では、新潟の北越学館も複雑な経緯をたどるし、⁽¹⁰⁾ 仙台の場合は、文部省直轄の第二高等中学校が設置されたこととも関わって、県の尋常中学校は廃止、東華学校がその代わりを担うという三つ巴の関係となる。高等中学校発足の影響という意味では、大阪の泰西学館や熊本英学校も同じであろう。

明らかに、森文政下の新教育制度実施に伴い、地域の教育体制は混乱、いいかえれば活性化し、そこにこそ、キリスト教勢力の関わる余地が生まれたのである。大阪・京都・岡山・仙台・新潟・熊本という最初に列挙したステーション開設地において、一八八五年から一八八七年に男子私立英学校が誕生したのは、伝道の発展という内在的理由もさることながら、こうした歴史的条件によるものであった。当該諸都市のほとんどが文部省直轄高等中学校設置箇所であったことは、まったくの偶然ではないのである。⁽¹¹⁾

以上をもって小括とする。

『同志社百年史』が通史のなかで東華学校を扱ったことは、同志社史を単に京都の同志社という一学校の歴史にとどめず、いわば「同志社という教育運動史」あるいは「地域史としての同志社史」への道を拓いたという意味において、慧眼だったといわねばならない。いずれ、研究の進展にともない、東華学校のみならず、新潟、同志社、あるいはアメリカン・ボードの関わった各地の私立英学校構想史が、同志社通史を彩る日が来るのではないだろうか。

本稿第一章で扱ったアメリカン・ボード宣教地における諸英学校の実態はさらに解明する余地があり、第二章でみたような、新潟と関わりながら各地に発生した英学校設立構想を新たに発掘していく必要もある。先ほど触れた、当時の教育界全体における「分校」計画の幅広い検討も含め、今後の課題としたい。

注

- (1) 『同志社百年史』 通史編一（一九七九年） 第一部第十章「仙台・東華学校」
- (2) 同 第一部第八章「同志社大学設立運動」
- (3) 一八八七年六月二十四日付土倉庄三郎宛新島襄書簡（『新島襄全集』 3 書簡編Ⅰ（同朋舎出版、一九八七年）所収）。
- (4) 新島、あるいは次のデフォレストや田村直臣のことばは、本井康博「アメリカン・ボード200年 同志社と越後における伝道と教育活動」（思文閣出版、二〇一〇年）の第一部第二章四「J・H・デフォレストと新島襄」によって指摘されたものである。
- (5) デフォレストの言は、「予は富田鉄之助氏より同志社分校設立の請を受けたる新島襄博士と共に明治十九年を以て仙台に來れり」（『廿年間の宣教経歴』（福永文之助編『回顧二十年』警醒社書店、一九〇九年）と記される。また、田村直臣は、「仙台には……同志社の分校が出来、市原盛宏君が新島襄君の代理となつて其処へ乗込んだ」（『信仰五十年』（警醒社書店、一九二四年）と記述する。また管見の限り、東華学校に関する論考で「同志社の分校」との表現をはじめて使ったのは、川端純四郎「同志社と東華学校」（『同志社時報』第二十四号、一九六九年）である。
- (6) 本井康博「京都ステーションの特異性」（同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師——神戸・大阪・京都ステーションを中心に、一八六九—一八九〇年』（『教文館、二〇〇四年』。のち注（4）著書に第一章三として収録）。
- (7) 守屋友江「ステーションからアウトステーションへ——岡山ステーションの形成と地域社会」（前掲『アメリカン・ボード宣教師』所収）
- (8) 吉田亮「序——神戸・大阪・京都ステーションの形成」（前掲『アメリカン・ボード宣教師』の付表参照）。
- (9) 『同志社百年史』 資料編一（一九七九年）所収。
- (10) 宣教師文書も使用し、キリスト教史の立場からまとめられたのが、茂義樹「泰西学館について」（『キリスト教史学』第三十六集、一九八二年）である。相前後して発表された井上琢智「大阪泰西学館小史——大阪における明治教育史の一齣」（『大阪商業大学論集』第六十七集、一八八三年）は、新聞史料からカリキュラムを探究している点が興味深い。また最近

は、キリスト教とは無関係な学校になってからを主に扱う田崎公司「泰西学館に関する一考察——谷岡学園・大阪商業大学一二〇年の地下水脈」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』第三号、二〇〇二年)も出された。以下、特に注記のない限り、茂論文に依拠して叙述を進めていく。

(11) 拙稿「第三高等学校前身校とキリスト教」(『日本歴史』第六四三号、二〇〇一年)参照。

(12) 本井康博「清水泰次郎について——同志社、浪華女学校時代を中心に——」(『英学史研究』第二十号、一九八七年)所収の履歷書参照。ここには、彼が教えを受けた人物として、前身校時代も含めた大阪英語学校の外国人教師名が並んでいる。逆に、自ら学びながら、英語学校生徒を校長(本井論文では判読不明とされているが奥山政敬であろう)の依頼により教えるイートン(Eaton, Isaac 英)やテール(Tabor, Charles 英)といった外国人教員の子弟に英語教育を施したとされていることも面白い。彼は後に同志社で英語教師となるが、この履歷書は奉職にあたって学歴・教育歴の高さをアピールしているようである。

(13) 茂論文を『大阪朝日新聞』明治十九年九月四日の記事で補った。

(14) 茂論文を『大阪朝日新聞』明治十九年十月五日で補った。ここにある「シ、エム、フィッセル」は「O.M.Fisher」と綴ると思われるが、人物を特定できなかった。沢山保羅の義父にあたる田島は、それまで第三高等学校において漢文教師を務めていた(注(11)拙稿参照)。

(15) 太田雅夫『新島襄とその周辺』(青山社、二〇〇七年)第一章三「広津友信らの同盟退学——晩年の新島襄を支えた人々——」では、一八八六年三月に、外国人教師グリーンの言動に抗議して同志社を集団退学した九名中、広津と辻孝次郎が泰西学館を起こしたと書いているが、管見の限り、泰西学館に関わったのは広津と花畑であり、同志社を退学した彼らが泰西学館を設立したわけではない。

(16) 『大阪日報』明治十九年九月四日。

(17) 『大阪朝日新聞』明治十九年八月二十六日。注(10)井上論文参照。

(18) 『大阪朝日新聞』明治二十二年十一月十五日。この記事は茂論文が引用したものであるが、教員名の「菅原」「管」は同様の広告が掲載された十二月二十七日の「菅原」「菅」の文字の方が正しいであろう。

(19) 中瀬古は昭和期になって第三高等学校の教員を務める。松浦政泰は同志社英語普通科を一八八七年六月に卒業している。松浦については、宮澤正典『同志社女学校史の研究』(思文閣出版、二〇一一年)の第二章二「同志社女学校専門科開設——松浦政泰の理念——」を参照。その他の日本人教員については不明。

- (20) 『大阪朝日新聞』明治十九年十月五日。
- (21) 注(11) 拙稿参照。この学校は、文部省の制度改革の影響をまともにうけて、前出大阪英語学校など頻繁な改組が繰り返されるが、人員や校地には継続性があった。
- (22) 注(10) 井上論文は、泰西学館の生徒減少の理由を、J・B・ヘール『日本伝道二十五年』(大阪女学院、一九七八年)にのっとり、一八八八年頃から政府が官立学校で英語を教えることを強化したためと理解している。だがそもそもこれは和歌山のケースに関することであり、原語の“government”や“government school”は、それぞれ県、県立学校と訳されるべきだったのであって、大阪の事情には直接適用できなう。ヘール(Hale, John B.)の原著 *Twenty Five Years in Japan* (大阪女学院、二〇〇九年) 参照。
- (23) アメリカン・ボードボストン本部クラーク(Clark, Nathaniel G.)宛レヴィット書簡(一八七九年二月十日)、同デフォレスト書簡(一八八〇年二月九日)。詳しくは注(11) 拙稿参照。同志社大学人文科学研究所蔵アメリカン・ボード宣教師文書マイクロフィルムを使用。
- (24) 一八九二年九月二十七日付ベル(Bell, David C.)宛内村鑑三書簡(『内村鑑三全集』36 書簡一(一九七九年、岩波書店))。前掲茂論文に用いられているが、ニュアンスの確認のため原文を参照し再和訳した。原文は“I will venture to call even the Doshisha itself for comparison”である。
- (25) 竹中正夫「岡山県における初期の教会形成」(『キリスト教社会問題研究』第三号、一九五九年)に、この学校に関して数行程度の紹介がある。竹中が典拠としているのは、J.H.Pettee, *A Chapter of Mission History in Japan 1869-1895* (Tokyo, Seibunsha 年不明。一八九〇年代カ)である。この中には“Schools For Young Men”の章があり、同志社、泰西学館、東華学校、熊本英学校、北越学館、薇陽学院が順次紹介されている。注(7)の守屋論文は、宣教師文書を用い、竹中の「備陽学院」との誤記を「薇陽学院」と修正し、宣教師がこれをどう捉えていたかに言及している。
- (26) 宣教師らの岡山への進出過程と池田学校への期待に関しては、拙稿「明治前期における医学・洋学教育体制の形成とキリスト教界 ―岡山県とアメリカン・ボード―」(『キリスト教社会問題研究』第五十四号、二〇〇五年)を参照。
- (27) 以下、注記のない限り、『薇陽』(一八九四年。近代日本デジタルライブラリー所収)収載の「本院設立始末」(「設立后五年間の概況」)による。
- (28) 南海漁夫「薇陽学院諸子ニ望ム」(前掲『薇陽』所収)。南海漁夫は筆名と思われるが、本名は不明。
- (29) 注(25) Pettee 著書参照。

- (30) 「薇陽学院学科課程表」(前掲「薇陽」所収)
- (31) 「東華学校規則」(太田雅夫「東華学校関係資料集」〔桃山学院大学教育研究所 共同研究プロジェクト報告書〕二〇〇三年)所収。東華学校規則は何度も改正されるが、宮城英学校時代も含め、二時間という数は変わらない。ただし、各学年の総授業時間数も薇陽学院より東華学校の方が五時間ほど多い。
- (32) 注(28) 南海漁夫「薇陽学院諸子ニ望ム」
- (33) 一八八八年、一八九〇年の岡山ステーションレポートを用いた注(7) 守屋論文を参照。
- (34) 注(28) 南海漁夫「薇陽学院諸子ニ望ム」
- (35) 注(25) Petree 著書参照。
- (36) 後藤亮『正宗白鳥 文学と生涯』(思潮社 一九六六年)の「五 草双紙と聖書」参照。
- (37) “Annual Report of the Work of the American Board’s Mission, Co-Operating with the Kumiai Churches of Japan July 1896” p39. その後、岡山では、一八九六年一月から岡山英学校が新たに発足し、小泉土之丞を主宰として、学資のない青年へ労働自活と教育への道を開く活動が繰り返されていく。なお、この学校の規則などの原史料が、現在、和歌山大学の江利川春雄氏によって画像で公開されている (http://blogs.yahoo.co.jp/gibson_erich_man/22248213.html)。
- (38) 注(36) 後藤著書では、一八九五年一月に帰朝した安部と宣教師との間の信仰観の違いが閉校の原因にあったと推察しているが、宣教師は注(37)の報告書ではそのことに触れておらず、公教育の教育進展を挙げるのみである。
- (39) 熊本英学校の開校経緯や制度、関係者について言及した研究としては、山本十郎編『肥後文教と其城府の教育』(熊本市、一九五六年)の第六章(三)「熊本英学校と海老名弾正」と田中啓介編『熊本英学史』(本邦書籍、一九八五年)第三章の上河一之「熊本英学校」が挙げられる。思想弾圧問題に関する研究は、茂義樹「熊本英学校事件をめぐって」(『キリスト教社会問題研究』第三十七号、一九八九年)や、関連人物研究の立場からの新稿である坂井誠「柏木義円の国家主義教育批判」(『社会科学』第四十一巻第二号、二〇一一年)などがあるが、学校そのものについては、山本あるいは上河の研究に負っている。本稿でもことわりのない限り、山本と上河の叙述に従う。
- (40) 日本基督教伝道会社「日本基督教伝道会社略史」(一八九八年)所収の附録(四)「伝道会社創立以来之伝道地并派遣伝道師一覽表」による。
- (41) “First Annual Report of the Kumamoto Station” © “School Work” 熊本基督教伝道会社 “Report of the Work of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, in Co-Operation with the Kumiai Churches of Japan for the Year Ending April

30th, 1891”より“Kumamoto Station”参照。宣教師中、男性二人と女性一人が毎日一時間教えたという。

(42) 前注“School Work”参照。

(43) 『日本組合熊本基督教教会沿革』（一九二六年）参照。校地に関する記述は、上河の記述とくい違いがみられる。なお、同書によれば、講義所は一八八五年から設けられ、一八八九年に仮教会が建設されたとされている。注（40）の表によれば、教会設置は一八九五年とされる。

(44) 注（41）“School Work”および“Second Annual Report of the Kumamoto Station”の“The Kumamoto Boys' School”を参照。
 (45) この段落については、前注“School Work”と“The Kumamoto Boys' School”および注（39）山本編者による。熊本英学校になってからの専門的科目や使用された教科書については、山本編者に福田令寿による回想が掲載されており、具体的に知ることができる。

(46) 東華学校については、拙稿「東華学校史再考——「半県半民」学校の射程——」（『一八八〇年代教育史研究年報』第三号、二〇一一年）参照。東華学校に関しては触れなくてはならない研究史についてもこちらに譲る。

(47) 済々黌の概要については熊本県教育会『熊本県教育史』中巻（一九三二年）を、済々黌をめぐる人脈については佐喜本愛「一八八三年徴兵令改正と中等教育——熊本の中等教育を中心として——」（『九州大学教育基礎学研究』第二号、二〇〇五年）を参照。

(48) 注（44）“The Kumamoto Boys' School”

(49) 第五高等中学校の開校経緯については、とりあえず第五高等学校開校五十年記念会編『五高五十年史』（一九三九年）を参照。

(50) 第五高等中学校への入学実態については、小宮山道夫「高等中学校と尋常中学校との接続関係に関する研究——第五高等中学校における入退学実態の分析——」（『一八八〇年代教育史研究年報』第三号、二〇一一年）を参照。

(51) 一八九二年に国家主義に否定的な発言をした教員奥村禎次郎を解雇するよう、県知事松平正直が英学校に命令を下し、奥村解雇にいたった事件。知事命令を受諾しない立場の柏木らが学校を去った。この事件の経過や思想的意義については、注（39）に挙げた諸論考をはじめ、種々の考察が重ねられているが、本稿では立ち入らない。

(52) 一八八八年三月二十七日海老名弾正宛新島襄書簡（前掲『新島襄全集』3所収）。次注の書簡を含め、注（39）の山本編著が言及したものである。

(53) “Report of the Work of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, in Co-Operation with the Kumamoto English Churches of Japan for the Year Ending March 31st, 1892.” 及び “Educational Work” の“The Kumamoto English

School (Ei Gakko) 参照。

- (54) 一八八九年三月十三日海老名弾正宛新島襄書簡〔『新島襄全集』4書簡編Ⅱ（同朋舎出版、一九八九年）〕。
- (55) 福井での民権運動については、大槻弘『越前自由民権運動の研究』（法律文化社、一九八〇年）があり、杉田定一に関しても多くの研究があるが、とりあえず『福井県史』通史編5 近現代一（一九九四年）の「第一章第三節 自由民権運動のうねり」を参照。
- (56) 「出遊記」明治十六年八月廿三日の項（『新島襄全集』5 日記紀行編（同朋舎出版、一九八四年））。
- (57) 「同志社大学記事」（前掲『新島襄全集』1 教育編（同朋舎出版、一九八三年）所収）
- (58) 注（55）『福井県史』通史編5を参照。
- (59) 家近良樹「ある豪農親子の近代——杉田仙十郎・定一夫婦の場合——」（『日本歴史』第七二三号、二〇〇八年）
- (60) 大阪経済大学日本経済史研究所編『杉田定一関係文書目録』（二〇〇七年）の「その他 教育」の項参照。
- (61) 前掲『同志社百年史』資料編一所収。
- (62) 注（59）家近論文参照。
- (63) 一八八七年十二月十四日新島襄宛杉田定一書簡（『新島襄全集』9〈上〉（同朋舎出版、一九九四年）所収）
- (64) 「同志社大学創立記事」（前掲『同志社百年史』資料編一）所収。杉田の最初の妻、都賀の実家が岡部家であった。後出の鈴とは、都賀病死の後、一八八四年七月に結婚する（注（59）家近論文参照）。
- (65) 一八八六年十二月二十日新島襄宛岡部広書簡（前掲『新島襄全集』9〈上〉所収）
- (66) 福井県議会史編さん委員会編『福井県議会史議員名鑑』（一八七五年）
- (67) 以上、福井県議会史編さん委員会編『福井県議会史』第一巻（一九七一年）の第八章「明治十九年の県会」による。
- (68) 一八八七年一月二十七日新島襄宛岡部広書簡（前掲『新島襄全集』9〈上〉所収）
- (69) 新島遺品庫〇七七八^a
- (70) 福井県教育史研究室編『福井県教育百年史』第一巻通史編（一）（一九七八年）の第四章「私立学校の創設」より第一節「明治の私学教育」。
- (71) 一八八八年一月十六日新島襄宛岡部広書簡（前掲『新島襄全集』9〈上〉所収）
- (72) グリーンは南北戦争の際に、大学書生から奮然義勇軍に身を投じ、陸軍少将にまで列せられたが、戦争が終わると書生に復し博士の位を得た「学徳両備ノ一大家」だと「移文」は記す。またグリーンは、彼の親友グリフィスは、福井を「第二

故郷」とみなしており、「越前人民ノ熱望」とあらば自ら来福するかもしれないと述べたという。

(73) 一八八七年四月五日新島襄宛岡部広書簡(同右)

(74) 一八八七年三月十五日新島襄宛岡部広書簡(同右)

(75) 一八八七年十二月二十二日新島襄宛岡部広書簡(同右)

(76) 一八八八年一月十六日新島襄宛岡部広書簡(同右)

(77) 一八八八年一月二十四日新島襄宛岡部広書簡(同右)

(78) 前掲『福井県教育百年史』の第二章「中等教育の進展」より第一節「中学校教育の振興」。ただし渡辺が「東京大学総長」とされているのは間違いである。ハルコムについて詳しいことは不明。

(79) 詳しくは前掲『福井県議会史』第一巻第十章「明治二十一年の県会」を参照。

(80) 一八八八年十二月付、前掲『新島襄全集』3所収。

(81) 一八八九年五月二十七日付、前掲『新島襄全集』9〈下〉所収。

(82) 一八九〇年一月六日、岡部は病床の新島に福井のウニを送っている(新島遺品庫一五二)。

(83) 前掲『日本基督教伝道会社略史』所収の「美談一束」参照。福井伝道、あるいは新島と福井との関わりについては、菱本丈夫「福井と同志社及新島襄先生を思ふ」(一九三六年、『福井評論』第十二巻に連載されたもの。新島遺品庫一六一)がある。

(84) 「出遊記」明治十六年八月廿日の項(前掲『新島襄全集』5所収)。「松浦庄ノ助」とあるのは判読ミスで、「喜」が正しいのではなからうか。新島遺品庫六七一の原文書参照。

(85) 注(83)「美談一束」参照。同注菱本論考にも松浦に関わる記載があるが、神戸ではなく横浜で入信したとある。

(86) 松原の信仰上の経歴については、「松原孫七郎翁のこと」(金子白夢『宗教生活』(一九二三年、京文社)所収)参照。なお、前掲「伝道会社創立以来之伝道地并派遣伝道師一覧表」によれば、福井派遣伝道師は、一八八〇年に上代知新、一八八一年に長谷川末治・上原方立、一八八二年に竹原義久、一八八三年に竹原と三宅荒毅、一八八四年に竹原、一八八五年に藤田愛治、一八八六・一八八七年に松原、一八八八年に松原と大宮、一八八九年に大宮となっている。

(87) 「日本基督教伝道会社派遣実況月報 明治廿一年十月分」(同志社社史資料センター所蔵)

(88) 代表的なものに、竹中正夫「良寛とキリスト 大宮季貞の生涯をたどって」(考古堂、一九九六年)がある。詳しくは、竹中著書の巻末文献リストを参照。本稿での大宮の略歴は竹中著書の巻末年表による。

(89) ジョン・ギュリキ校閤大宮貞之助訳『正則英和会話大全』(一八八七年)。奥付に大宮の大阪での居所が「大阪府下西区土

佐堀裏町廿一番地寄留」と記入されている。

(90) 前掲『同志社百年史』資料編一所収。

(91) 注(4) 本井著書第三部第二章「北日本ミッション年次報告」の八「一八九三年(第十一年次報告他)」参照。

(92) 玉村直編『福井案内記』(福井案内記編纂会、一九〇九年)、池内啓「二地方新聞の軌跡——第2次福井新聞の1年9か月と南越倶楽部——」(『福井県文書館研究紀要』第3号、二〇〇六年) 参照。

(93) 前掲『福井県教育百年史』第一巻によると、一八九〇年三月には別のアメリカ人「ドンケルキュルチユス」が雇用され三ヶ月ほどで解雇、九月からは新たに「エルブラウネル」を雇用と、外国人教員枠は引き継がれたものの、人事は安定しなかったようだ。

(94) 熊本英学校は、同志社出身の伝道師が教会の設置に先立って教育活動を開始したし、生徒も同志社に多く進学するので、「同志社分校」の意識があったかもしれないが、今後のより詳しい検討が必要である。なお、本井は「熊本」を列挙していない。

(95) 注(3) 新島襄書簡。

(96) 慶応義塾編『慶応義塾百年史』上巻(一九五八年) 第三章第三節内の「分校の設置」参照。次の引用も、同書所収の「設立願」による。

(97) 以下、東華学校については、注(46) 拙稿参照。

(98) この問題については、拙稿「地域医学教育態勢と新島襄の医学学校設立構想——一八八〇年代前半における展開」(『キリスト教社会問題研究』第五十七号、二〇〇八年) を参照。

(99) 注(10) 茂論文参照。

(100) 一八七〇年代後半における西や中川の働きについては、注(26) 拙稿を参照。彼らは民権運動にも一時傾倒するが、県官を務めた時期もあり、県令とのつながりも深かった。

(101) この点について今回は言及できなかったが、新潟県教育百年史編さん委員会編『新潟県教育百年史』明治編(一九七〇年)、本井康博『近代新潟におけるキリスト教教育 新潟女学校と北越学館』(思文閣出版、二〇〇七年)、新潟県プロテスタント史研究会編『明治教育秘史 新潟女学校と北越学館』(新潟日報事業社、一九九〇年) を参照。

(102) 岡山には、大阪から京都に移転される第三高等中学校の医学部が別置された。このうち新潟のみが高等中学校設置地とならなかったが、金沢の第四高等中学校の設置区域に指定されたことへの反発もあり、新潟県令以下、単独の高等中学校設置運動が展開されていた。